文部科学大臣賞

あちら側までご一緒に

福岡県　明治学園小学校　五年
能美　にな

「よかったら、あちら側までご一緒しませんか。」
一緒に信号待ちをしていた母が、隣の人にそう声をかけた。
「え、いいんですか？」
応えた声のほうをみると、車いすに乗った男性と、その後ろに女性が立っていた。
急に降りだした雨。こちら側の屋根から向こうのアーケード街までの横断歩道はたった３０歩足らず。それなのに、雨は土砂降(どしゃぶ)りでカサをささなければびしょぬれになってしまう。
「もちろんです。少しですけど。」
母はそう言って、今度は私に向かってにっこりした。信号が青になるとすぐに、母は赤、私は黄色のカサをぱっと開いた。母と女性は一緒に、私は車いすの男性と一緒にカサに入った。
私の目線は男性とほぼ同じで、ほんの少しの時間だったのに、たくさん話をすることができた。いつも奥さんが車いすを押してくれること。雨の日には出かけないようにしていること。私は不思議に思って聞いてみた。
「どうして雨の日には出かけないんですか。」
「車いすを押していると、カサがさせないでしょう。」
と男性は答えた。たしかに、今もカサを持っているのは母だ。女性は両手で車いすを押して、私の斜め後ろを歩いている。
「奥さんが風邪ひいちゃったら困るでしょ。」男性は茶目(ちゃめ)っ気(け)たっぷりに笑って言った。
横断歩道の向こう側についてから、改めて丁寧(ていねい)にお礼を言われた。しかし私は、お礼を言われるような特別なことをしたわけではないような気がして、上手に返事をできずにいた。もじもじしていた私の心を見透(みす)かすように、男性がゆっくりと私に言った。
「ご親切にどうもありがとう。僕らはとっても助かったし、うれしかったんだよ。」
そう言われると、やっぱりいいことをした気がしてきた。それでも『どういたしまして』と言うのは恥ずかしい気がして、
「喜んでもらえて、私もうれしいです。」と答えた。
親切という言葉は不思議だ。どんなに親切を心がけていても、それを自分で言葉にした途端(とたん)に恩着せがましくなる気がするからだ。では親切は、どんなときに生まれるのだろう。なにげなくしたことが相手に喜んでもらえたとき、親切は生まれる。生まれたばかりの親切は、もちろん小さい。でもそこから生まれるのは、自分だけでは感じることのできない、他者を介した大きな喜びなのだ。
『行動』が『親切』になるためには小さな勇気が必要だ。土砂降りの横断歩道をみんなで渡ったときと同じように、声をかける、気持ちを言葉にする、そんな小さな勇気が、私たちの行動を親切という『あちら側』に連れていってくれる。
さあ、勇気を出して。
「あちら側まで、ご一緒しませんか。」